

「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉がある。自然災害はその被害を忘れたときに再び起こるものだという戒めである。科学者で随筆家の寺田寅彦の言葉だとされることが多い。

だが、もはやこの言葉は通用しない。天災は忘れる間もなくやってくる。日本という国が、日本人が、災害に対する考えやボランティア活動に対する意識を変えたのは、阪神・淡路大震災だっと思う。

平成7年1月17日午前5時46分、神戸に大規模な災害が発生したとの一方が自衛隊に入った。これを受けて、当時の海上自衛隊呉総監として災害派遣活動の指揮を執った加藤総監は8時5分、部隊に「災害派遣の部隊を出すので直ちに準備せよ」との指示を出している。

「総監、部隊を出されるのですね」「もう一度伺いますが、出されるのですね。県知事からの要請はないのですよ」補佐する立場の者が念押ししても総監の決断は揺るがなかった。災害基本法が見直された今は、自衛隊の自主派遣が可能である。当時の自衛隊法にもそれを認める記述はあったものの、過去に実行された例はなく、加藤総監の決断はそうした難しい状況のもとで下されたものだった。

後日、現地視察した玉澤防衛庁（当時）長官は、「初動が見事だった」と加藤総監の対応を称賛したという。また、震災の翌朝を六甲の自宅で迎えていた方の述懐も印象的である。

「茫然自失の状態でしたが、夜が明けるにつれ神戸港に見慣れない光景が浮かんできました。それは自衛艦でした。それも一隻や二隻ではなく、十数隻の艦隊が見えたのです。思わず胸にじんとくるものがありました。その瞬間、国家が我々に差し伸べている救いの手がはっきりと見えたのです」

その後海上自衛隊は救助活動、給水支援を中心に支援活動に尽力し、4月27日、役割を終えて撤収している。この様子は、当時、連日テレビで報道されていたので、今でも記憶に残っている。このときの経験が、東日本大震災や毎年のように繰り返される大雨や台風による災害でも生かされている。何より、日本にボランティア活動が根付くきっかけとなったことが大きい。

今年も、すでに新型コロナウイルス感染拡大に加えて、大雨による被害が続いている。もはや「天災は毎年必ずやってくる」状態である。今後も台風による被害などが想定される。備えあれば憂いなしとはいうが、備えても備えても、どうにもならないレベルの被害が続いている。

根本的、抜本的な防災あるいは減災のあり方を考えるべきときがきているように思う。今までもこれからも常に大地震の心配もある。今、首都直下型の大きな地震が発生したら、日本はどうなってしまうのだろうか。多くの人が不安を抱えていながらも、日々の生活に追われている現状ではあるまいか。

ここ数年、災害に災害が覆い被さってくる傾向があるように思う。弱り目に祟り目である。次から次へと危機がやってくる途切れることがない。危機に際しては、加藤総監のように決断を下し、後にそれが“英断”といわれるような人物が必要である。素早く適切な初期対応ができる人である。

2学期も、何が起こるかわからない。常日頃から危機対応を考えておかなければならない。それが素早い判断、そして英断へとつながる。